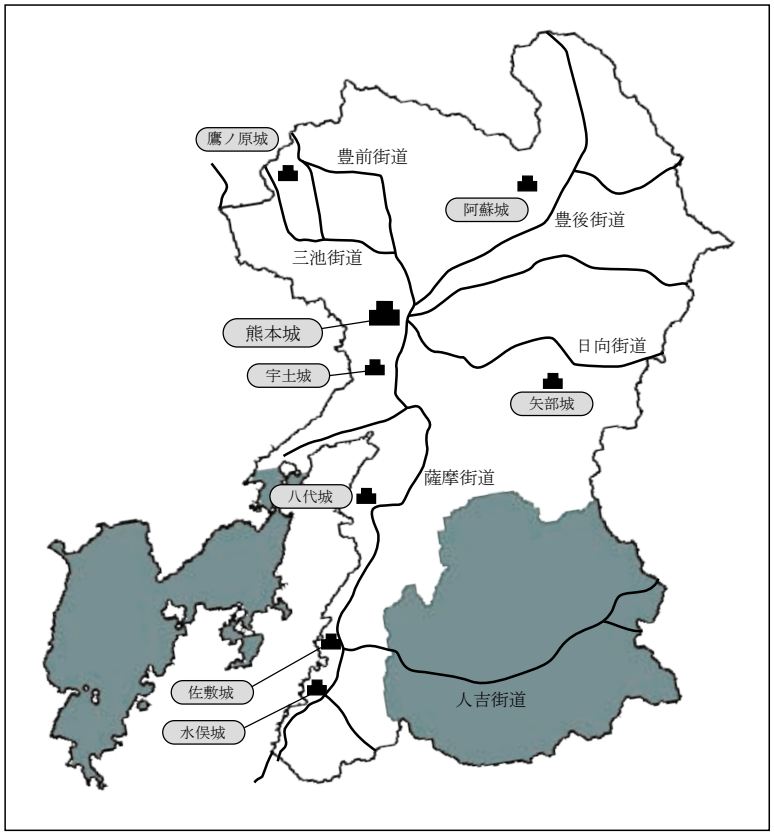
第３部　加藤清正の端城と地域の文化財



肥後熊本の端城位置図

鷹ノ原城跡（南関城・関ノ城）

鷹ノ原城（たかのはらじょう）

●所在地

玉名郡南関町大字関町字城ノ原

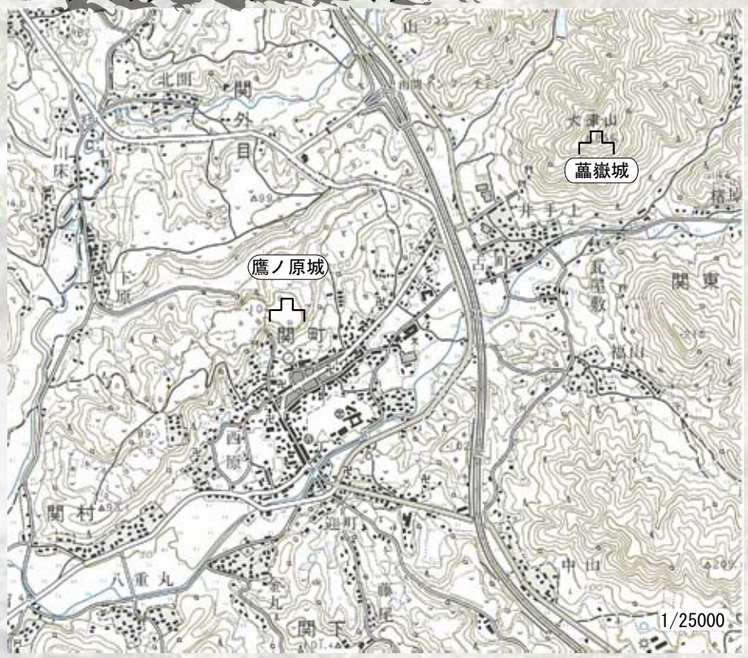
●文化財指定

指定なし

●アクセス

熊北産交バス「南関」下車

徒歩30分



西側虎口跡より望む本丸

本丸石垣の破却跡（西より）

城の立地

鷹ノ原城は、南関町役場北側の台地に位置します。その縄張りは、西から三の丸・本丸・二の丸という三つの曲輪から成り、北側に天然の要害である深い谷、南側には城下町が形成されました。域の規模は、台地上の平地で約90,000㎡、台地の裾部までを城域とみれば、約170,000㎡の面積があります。

城の歴史

南北朝のときに築城された蟠嶽城(南関町大字関東字城ノ平)が、南関地域の支配拠点として代々使用され、加藤清正の肥後入国後、蟠嶽城の城代には加藤清兵衛が就きます。後に清兵衛は失脚し、新たに蟠嶽城の城代として、加藤美作守正次が引き継ぎます。

鷹ノ原城の築城は、宝永3年（1706）に井沢蟠龍によって書かれた「南関紀聞」によれば、蟠嶽城の城代であった加藤美作守正次より新城の願いがあったとされています。その後、慶長5年（1600）の関ヶ原の戦いの直後、清正は自ら「高原」に上って縄張りを行ったという記述があります。

鷹ノ原城は、元和元年（1615）の一国一城令により廃城になったと考えられています。

発掘調査

平成7年度から鷹ノ原城跡の発掘調査が南関町教育委員会によって実施され、現在も調査中です。発掘調査によって、破却時の様子や城の規模などが徐々に明らかになりました。

特に、本丸部分の基礎工事は盛土によるもので、堀切を作ったときの土が利用されています。その土量は、10ｔダンプで約8,000台分にも及ぶと推定されます。また発掘では、城の登城口である東西の虎口跡や、本丸隅櫓台跡も確認されました。

鷹ノ原城は、一国一城令によって、築城から15～16年で破却されています。壊された石垣の石材は、ひとつひとつ運んで、空掘の底一面に敷き詰め、堀の斜面を削った土で覆い隠されていました。

また、本丸西側石垣の発掘調査の際に、一枚の寛永通宝が出土しました。この寛永通宝は、寛永13年(1636)に鋳造開始された「古寛永」と呼ばれるものの一つです。

これにより、少なくとも寛永13年以降のある時期に、再度破却された可能性があります。天草・島原の乱を契機に、細川氏は国内の廃城を再調査していますので、この頃の破却であると考えられます。

西側虎口跡（北より）

地域の文化財

南関御茶屋跡（なんかんおちゃやあと）

藩主が参勤交代や藩内の巡視をする際に、休憩・宿泊として利用した。国指定。

小岱焼窯跡群（しょうだいやきかまあとぐん）

起源は細川忠利公の肥後入国までさかのぼる。

城ノ原官軍墓地（じょうのはらかんぐんぼち）

西南戦争時、木葉(現玉東町)、高瀬(現玉名)の戦闘で戦死した政府将兵が眠る。

肥猪町官軍墓地（こえいまちかんぐんぼち）

西南戦争時、鍋田・平山(現山鹿市)の戦闘で戦死した政府軍将兵が眠る。

麻抜場橋（おこんばばし）

十九世紀に築かれたアーチ式の石橋。大津山公園に移転復元されている。

大津山公園（おおつやまこうえん）

公園には、南北朝時代に築城された蟠嶽城がある。

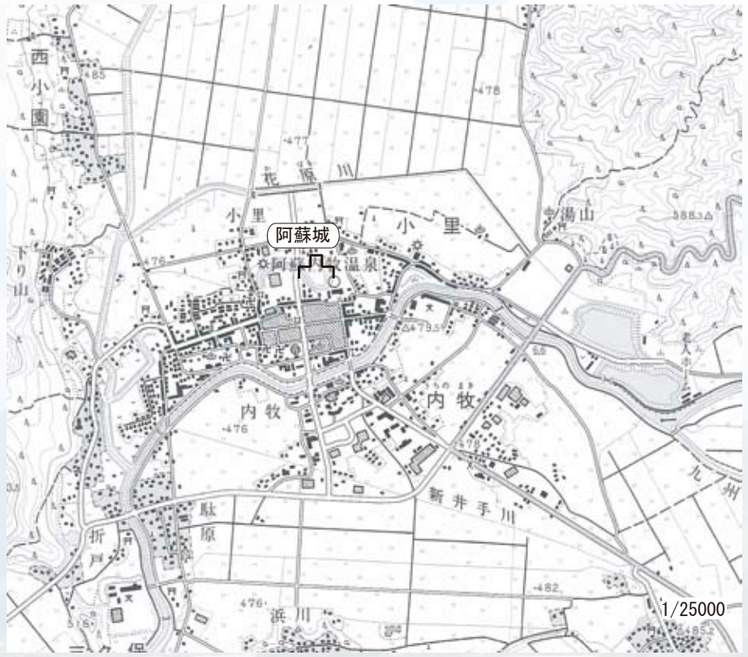
阿蘇城（内牧城）

阿蘇城（あそじょう）

●所在地
阿蘇市大字内牧字中町

●文化財指定
指定なし

●アクセス
九州産交バス「内牧」
徒歩３分



二の丸推定地（阿蘇町役場跡北側）

城の立地

阿蘇城は、黒川右岸の自然堤防上に位置します。天正期に阿蘇大宮司家の家臣、辺春丹羽守が入城したのがはじまりといわれています。

加藤氏の時代

加藤時代の城代には、加藤清左衛門可重（右馬允）が任命され、慶長9年（1604）可重の死去により、その子清左衛門正方が後を継いでいます。

慶長17年（1612）には、正方は筆頭家老となって八代に移り、その後、八代城代となりました。阿蘇城には、廃城となった矢部城の家臣団も居住しましたが、元和元年（1615）の一国一城令によって破却されます。

石垣

石垣に残された矢穴

現在の状況①

小字名として「本丸」「二の丸」「三の丸」の地名が残り、水堀の役目を果たしたといわれる旧河川が部分的に残っています。現在、市立体育館がある場所が本丸、阿蘇町役場跡地一帯が二の丸と推定されています。

墓所から内牧を望む

現在の状況②

旧河川周辺は公園として整備され、市民の憩いの場となっています。

阿蘇町役場跡地の北を東西に走る道路に沿って、道路面から高さ1m程度の、数段の石垣を目にすることができます。大部分は積み直されたものですが、面が平滑な割石で、割面に矢穴の痕跡が認められるものは、加藤時代のものとする説があるようです。

城代の墓所

阿蘇城代であった加藤清左衛門可重の菩提寺は内牧にあり、子の清左衛門正が建立したと伝えられています。墓所は湯山にあり、五輪塔の墓碑の上に御堂が建てられています。御堂のある所は高台で見晴らしがよく、内牧の街を見渡すことができます。

この墓所は「うまんじょうさま」と呼ばれて、地元で慕われています。

地域の文化財

二重峠石畳（ふたえのとうげいしだたみ）
肥後と豊後豊崎とを結ぶ街道。

的石御茶屋跡（まといしおちゃやあと）
参勤交代の際の休憩所として、細川綱利の代に開かれる。北外輪山の伏流水を活かした庭園があり、くまもと名水百選に選ばれている。

中通古墳群（なかどおりこふんぐん）
長目塚古墳は熊本県最大級の前方後円墳。昭和２４年（１９４９）の発掘作業では、成人女性の人骨と多くの副葬品が発見された。

阿蘇神社（あそじんじゃ）
古代以来重要な地位を占めてきた肥後の一の宮。現在の建物は天保六年（一八三五）～十数年かけて再建されたもので国指定。

西巌殿寺（さいがんでんじ）
開基は天養元年（一一四四）。島津氏の侵略を受け焼失したが、加藤清正によって慶長年間に再興された。

古坊中（ふるぼうちゅう）
八～十二世紀にかけて、火山信仰と山岳仏教とが融合して栄えた霊験の跡。最盛期には四〇〇人近い僧侶が修行を積んでいたといわれる。

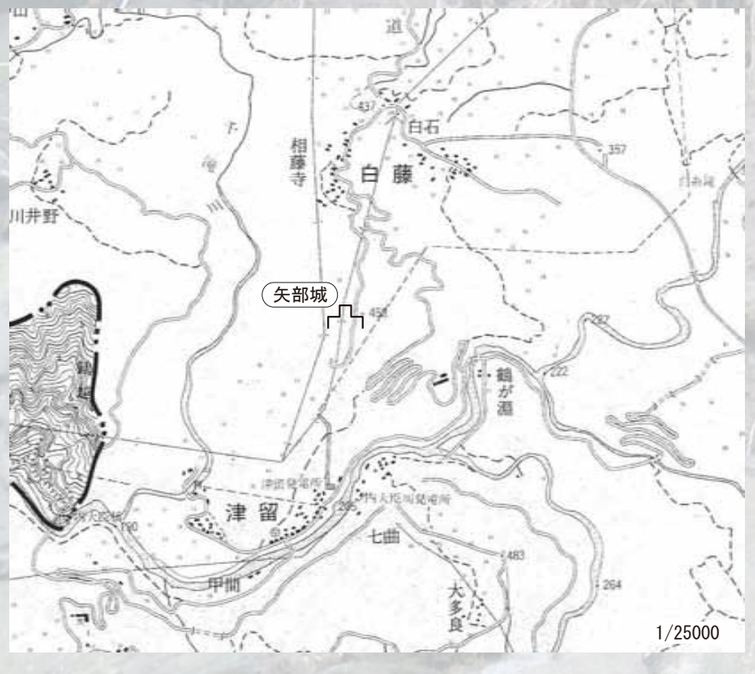
矢部城（愛藤寺城・相藤寺城・愛東寺城）

矢部城（やべじょう）

●所在地
上益城郡山都町大字白藤下町口

●文化財指定
町指定

●アクセス
御船ICより50分
(国道445号線～県道180号線)



矢部城本丸

矢部城二の丸

城の立地

矢部城は緑川と千滝川の峡谷に囲まれた相藤寺集落の南側に広がる白糸台地に位置しています。現在は茶畑や山林になっていますが、「本丸」「二の丸」「三の丸」「城門」の小字名が残っています。

貞応元年（1222）に阿蘇大宮司惟次が天台宗愛藤寺を他所に移動して築城したと伝えられています。

小西氏の肥後入国前は阿蘇家家臣犬飼備前守、小西時代には結城弥平次が城代に就いてます。加藤時代には長尾善政、ついで加藤正直が城代となりました。

城跡に関する遺構は本丸の西側に堀切、北側に2か所の古井戸があります。また城門から二の丸の東側の山林には、堀切・空堀などが残っています。

小西時代の矢部城

矢部城から多量の瓦が出土していますが、そのなかに昭和46年に畑の中からクルス紋軒丸瓦が発見されました。小西行長はキリシタン大名として知られており、結城弥平次もキリスト教信者といわれているので、その関係があるかも知れません。

本丸石垣

加藤時代の矢部城

関ヶ原の戦い後、加藤清正の端城として改修が進められたと考えられています。矢部城は日向国に最も近い位置にあり、「境目」を強く意識したと考えられます。本丸には加藤時代に作られたと考えられる石垣が確認されています。二の丸・三の丸には石垣が無いため、本丸のみに改修の重点を置き、二の丸・三の丸は阿蘇大宮司時代・小西時代と同様に、城主の家臣・与力衆の屋敷地だったと考えられています。

慶長17年（1612）には、宇土城・水俣城と共に廃城となりました。細川氏が慶安４（1651）年に幕府に提出した報告には、「愛東寺古城　曲輪（くるわ）二千二百間」とあり、加藤領の端城の中で最も大きかったことがうかがえます。

地域の文化財

通潤橋（つうじゅんきょう）
安政元年（一八五四）布田保之助によって灌漑のために造られた。水道橋、眼鏡橋としては日本一の大きさを誇る。国指定。

岩尾城（いわおじょう）
阿蘇惟次により、矢部城とともに築かれた山城。

浜町橋（はまままちばし）
天保四年（一八三三）に建造された矢部の中心地に架かる石橋。

相藤寺の石畳（あいとうじのいしだたみ）
江戸時代に築かれた石畳。細川時代の道路を今に伝える。

道の駅　清和文楽邑（みちのえき　せいわぶんらくむら）
清和文楽館で江戸時代に豊後竹田から伝えられた人形浄瑠璃である清和文楽が見られる。

菅迫田（すげさこだ）
日本の棚田百選。鮎の瀬大橋に隣接した渓谷地帯の棚田集落。

宇土城−城山−

宇土城（うとじょう）

●所在地
宇土市古城町字古城
宇土市神馬町字古城

●文化財指定
市指定

●アクセス
九州産交バス
「宇土本町1丁目」下車
徒歩10分

宇土城（城山）遠景

石垣

石垣に残された矢穴

城の立地
宇土城（城山）は、有明海に突出した宇土半島の付け根、丘陵部から平野へと移り変わる独立した丘陵上に所在します。中世の城跡が復元されている宇土城（西岡台）から東に300mほど離れており、さらに東側には、現在の市の中心部である沖積平野が広がっています。

加藤氏の時代
天正16年（1588）、小西行長が入国した際に拠点を置いたのは、南北朝、室町、戦国時代の政治的中心地であった宇土城（西岡台）でした。その翌年に、新しく築城を始めた場所が宇土城（城山）です。慶長５年（1600）、関ヶ原の戦いの後に加藤清正の端城となります。清正は大規模な改築を行いましたが、没した翌年の慶長17年（1612）、幕府により宇土城の破却が命じらました。
後年に書かれた『宇土軍紀」には、寛永15年（1638）、島原の乱の後に再度、徹底した破壊が行われた記述があります。

城山公園広場

発掘調査でわかったこと
宇土城（城山）では、昭和53年度から昭和59年度までの間に、宇土市教育委員会による発掘調査が実施されました。その結果、破却された石垣の下に、長さ38.7mにおよぶ石垣が確認されました。石垣は裏込め石をもつ打ち込みハギ技法、石垣は野面積み技法によるものです。積み方の違いは、異なる時期に、築かれた石垣であることを示しています。現在確認できる石垣・縄張りの大半は、加藤清正が造り直したものであることが分かっています。

現在の状況
公園として整備され、公園駐車場近くでは、当時の石垣の一部を見ることができます。芝生の緑鮮やかな公園の広場は、宇土城（城山）の主郭にあたる部分です。広場を見渡せる場所に、小西行長像が静かにたたずんでいます。

地域の文化財

宇土城跡西岡台（うとじょうあとにしおかだい）
中世の在地領主の宇土氏や名和氏の居城。国指定を受け、歴史公園として整備されている。

轟泉水道（ごうせんすいどう）
宣文三年（一六六三）完成。人々の生活用水として利用され、現在使われている上水道では日本最古である。

船場橋（せんばばし）
長さ13・7m、幅4・1mの石造り単一アーチ橋。壁石は安山岩、高欄にはピンク石の馬門石を使用。

武家屋敷の表門（ぶけやしきのおもてもん）
宇土支藩の家臣たちの武家屋敷跡地。市指定の高月家には、長塀や当時の建物が残っている。

大太鼓収蔵館（おおだいこしゅうぞうかん）
雨乞い祭りで使われてきた大太鼓を一同に集めて展示。二十六基の大太鼓が整然と並ぶ姿は圧巻である。

轟貝塚（とどろきかいづか）
古くは大正時代に発掘調査が行われている。出土した土器は儀式土器として全国的に有名。

八代城（麦島城・松江城）

麦島城（むぎしまじょう）

●所在地　八代市古城町

●文化財指定　市指定

●アクセス

熊本産交バス

「農事センター」下車　徒歩1分

松江城（まつえじょう）

●所在地　八代市松江城

●文化財指定　県指定

●アクセス

熊本産交バス

「松井神社前」下車　徒歩10分

麦島城の石垣（現地説明会時撮影）

保存された石垣（八代市シルバー人材センター）

城の立地

八代城（麦島城）は、前川と球磨川に挟まれた中州に位置しています。「慶長国絵図」では前川は球磨川とつながっておらず、当時は入江だったと考えられます。現在では城跡の面影はほとんど残っていません。天正16年（1588）、小西行長が肥後下半国の大名として入国し、相良氏の城であった古麓城を廃城とし、八代城（麦島城）を築城しました。

加藤氏時代の八代城

関ヶ原の戦い後、加藤氏の端城となりました。加藤清正の時代には城代は置かれず、家人が在番となり、加藤忠広の代に加藤右馬允正方が城代を務めました。

元和元年（1615）、内牧城・鷹ノ原城・佐敷城が破却された後も唯一の端城として存続しました。水俣城・佐敷城の廃城後は、熊本城の南に位置する城となり、島津氏・相良氏に対する「境目の城」としての役割を果たしたと考えられます。

元和５年（1619）、地震により崩壊したため、幕府の許可を得て球磨川北岸の松江に移築されました。現在の八代城跡がこれに当たります。

細川藩以降の八代城（松江城）

寛永9年（1632）に加藤氏が改易されると細川忠利の端城として、隠居の細川忠興（三斎）の居城となります。忠興の没後は、家老松井氏が明治3年に廃城するまで代々居城しました。

現在では、天守閣や櫓などの建物は残っていませんが、内堀と石垣が当時の面影を伝えています。

松江城大天守・小天守

発掘調査（麦島城）

麦島城は、発掘調査によって小天守跡が確認されました。これまで城の西側は海に面していると考えられていましたが、幅約50mの堀があり、堀の西側にも町が広がっていることが判明しました。

石垣に使用されている石には、割るときに使用する矢穴はあまりみられません。地元白島産の石灰岩が使用されています。

出土した瓦には桐紋鬼瓦・金箔鯱瓦・滴水瓦があります。多くの瓦は地元の平山瓦窯で焼かれたと考えられていますが、滴水瓦には、中国の明時代の年号で隆慶２（1568）年と萬暦12（1584）年の銘がありました。滴水瓦は朝鮮出兵によって持ち込まれたと考えられます。

二の丸推定地からは、石垣の外側に倒壊した櫓の一部が確認されています。麦島城は存続期間が30年余りと短いため近世初頭の城郭の様子を知る貴重な資料です。

地域の文化財

古麓城（ふるふもとじょう）

相良氏の八代統治の拠点。

妙見宮（みょうけんぐう）

文治元年（一八六）に現在の地に建立されたといわれ、十一月に行われる「妙見祭」は九州三大祭の一つ。

松浜軒（しょうひんけん）

松井直之が元禄元年（一六八八）に母崇芳院のために建てた御茶屋。庭園は国指定名勝。

平山瓦窯跡（ひらやまかわらかまあと）

麦島城、八代城の瓦を焼いた「だるま窯」と呼ばれる窯。

江東山春光寺（こうとうざんしゅんこうじ）

松井家の墓所。大書院など一部の建物は熊本市から移築されたもの。

郡築三番町樋門（ぐんちく さんばんちょうひもん）

明治三十三年（一九〇〇）八代郡役所によって行われた干拓堤防の樋門。国指定。

佐敷城

佐敷城（さしきじょう）

●所在地

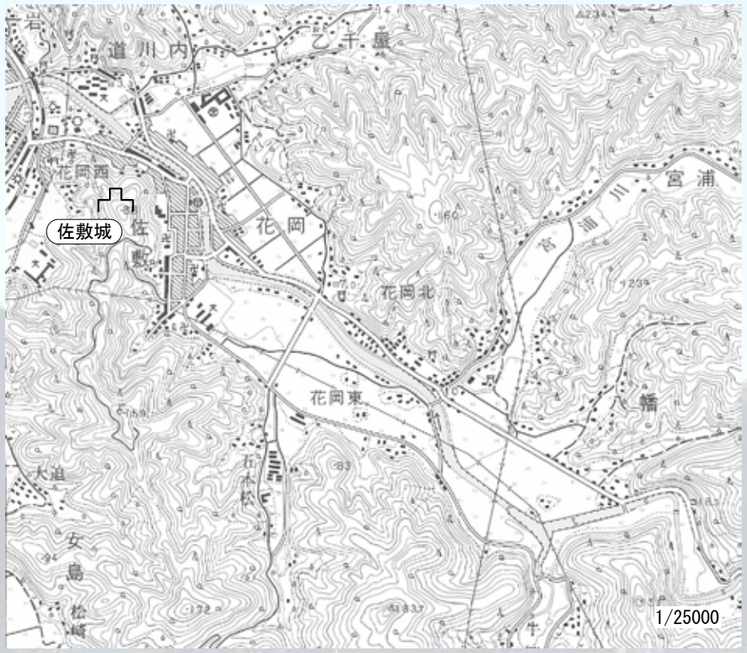
葦北郡芦北町大字佐敷字中丁
字山崎
大字花岡字杉村

●文化財指定

国指定

●アクセス

肥薩おれんじ鉄道
「佐敷駅」下車　徒歩20分



本丸より望む佐敷川

追手門

城の立地

佐敷城は、ＪＲ佐敷駅から東側に位置する丘陵(城山)に築かれ、北から本丸、二の丸、三の丸の順に曲輪が形成されています。また、城の東側には城下町が形成されました。

城が立地する丘陵から西側の平野部は干拓地で、当時は佐敷湾が山裾まで広がっていました。佐敷城の南東から北西に向かって流れる佐敷川は、芦北と人吉を結ぶ水上交通として利用されていました。

城の歴史

佐敷城の佐敷城代は、佐々成政の家臣で、成政の改易後、加藤清正の家臣となる加藤(澁谷)与佐衛門重次が就きます。

佐敷城は、元和元年（1615）の一国一城令により廃城となりますが、加藤家改易後、肥後国に入国した細川氏によって、寛永１５年（1638）2回目の破却を受けます。これは、前年に起こった天草・島原の乱の影響によって行われました。今残る石垣はそのときのものです。

発掘調査

芦北町では、佐敷城跡の整備復元を目的とし、平成6年度から平成13年度にかけて佐敷城跡の発掘調査が行われました。現在では、最後の破却を基本とした整備がなされ、当時の佐敷城を知ることができます。

発掘調査では大量の瓦が出土し、瓦の種類も豊富でその中でも、「天下泰平国土安穏」の銘が入った鬼瓦が発見されました。この鬼瓦は、追手門跡から完全な形で出土し、破却時の様相を知るうえで重要な資料で、県の指定文化財となりました。

二の丸石垣（南より）

梅北の乱と佐敷城

梅北の乱は、佐敷城が舞台となった有名な事件です。

当時、佐敷城の城代であった加藤(澁谷)与佐衛門重次は、朝鮮出兵により出陣していました。その頃、島津氏の家臣であった梅北宮内左衛門が率いる部隊が、朝鮮出兵のための船を待つという名目で佐敷に集まってきました。

その時に梅北宮内左衛門は、豊臣秀吉から指示を受けたという嘘を言って、佐敷城の留守をしていた井上勘兵衛らに城を明け渡すよう要求しました。不審に思った井上勘兵衛らは、加藤(澁谷)与佐衛門重次の妻子を城外に逃がしたのち、梅北宮内左衛門に城を明け渡しました。数日後、井上勘兵衛らの策略により、酒盛りの席で梅北宮内左衛門を討ち取り、佐敷城を取り返しました。

地域の文化財

藤崎家住宅（赤松館）主屋（ふじさきけじゅうたく せきしょうかん おもや）

江戸時代後期から芦北町の地主として栄えた藤崎家の邸宅。

葦北鉄砲隊（あしきたてっぽうたい）

葦北に伝わる砲術の文化振興を図るため平成十五年に結成された。

加藤家縁者石塔（かとうけえんじゃせきとう）

佐敷城代加藤与佐衛門重次の母親（左側）と奥方（右側）の墓と伝えられている。

日本一（にほんいち）の大瓦（おおかわら）モニュメント

佐敷城から出土した「天下泰平国土安穏」銘の入った鬼瓦を基に二十倍にして作成した巨大モニュメント。

佐敷宿（さしきしゅく）

江戸時代から戦前にかけて、薩摩街道沿いに発展した旧佐敷町の町並み。

うたせ船（ぶね）

明治十四、十五年頃に、瀬戸内地方（一説には明治十八年に高知県）から伝わったとされる底引き網漁。

計石港では二十隻ほどが年間を通じて操業している。

水俣城

水俣城（みなまたじょう）

●所在地
水俣市古城1丁目

●文化財指定
市指定

●アクセス
九州産交バス
「水俣高校入口」下車
徒歩5分

水俣城

石垣

城の歴史

水俣城は、南に水俣川、西に八代海、北と東は山々に囲まれた、標高30～50mの丘陵に占地されています。築城時期は、相良氏が三郡（球磨・葦北・八代）の所領を始めた頃の鎌倉時代から室町時代と考えられます。城主については、相良氏、名和氏、深水氏・犬童氏（城代）、寺沢氏（城代）、中村氏（城代）などとされています。

天正9年（1581）に、相良義陽が島津義久との合戦にて敗れ、水俣城は島津氏の所領となります。天正15年（1587）には、豊臣秀吉による島津攻めが行われ、水俣は豊臣蔵入地となります。その後、水俣城には深水宗方が秀吉より命じられ城代となります。

加藤氏の時代

水俣は佐々成政が肥後平定に失敗し、加藤清正が肥後入国した後も、豊臣蔵入地でした。秀吉の死後、慶長５年（1600）には加藤氏支配となり、城代には清正と同郷で、婚戚であった中村将監がなりました。慶長16年（1611）に清正が死去した後、将監は水俣城内に妙勝寺を建て清正の冥福を祈ったとされています。現在、加藤神社のある場所です。

清正死後の翌年である慶長17年（1612）に幕命により、領内の宇土城・矢部城と共に破却されました。また、天草・島原の乱の翌年の寛永１５年（1638）、当時の領主であった細川氏より再び破却されます。今残る石垣はそのときのものです。

石垣に残る矢穴の跡

水俣城代のその後

水俣城最後の城代であった中村将監は、破却後に熊本へ戻ったとされていますが、詳細については不明です。一説によると仏門の道へ進み、順正寺（熊本市河原町）にて修行をした後に、名を楢木新左衛門と変え薩摩で布教活動をしたとされています。

その後再び水俣へ戻り仏門へ帰依し、覚定と称し、子の覚円が将監の後を継ぎ、正保2年（1645）に源光寺（水俣市浜町）を建立しました。源光寺には薩摩部屋というものがあります。これは、真宗が禁制であった薩摩より来た信者を受け入れた部屋のことで、現在、市の文化財に指定されています。

寛永9年（1632）に細川忠利は、肥後熊本の領主となり、翌年から、在所する深水氏が水俣手永の惣庄屋に命じられました。その後、深水氏は、手永廃止となる明治3年（1870）まで240年近く、代々、惣庄屋を務めました。最後の惣庄屋であった深水頼寛は、水俣村が誕生して初代の水俣村長でもありました。

地域の文化財

蘇峰記念館（そほうきねんかん）
徳富蘇峰に関する資料を収集・展示をする施設。国指定。

薩摩街道（さつまかいどう）
江戸～薩摩を結ぶ古道。

官軍墓地（かんぐんぼち）
西南戦争時、官軍の軍人・軍夫らが葬られる。

加藤神社（かとうじんじゃ）
水俣城代中村将監の直筆とされる加藤清正公霊牌がある。

新町の石橋（しんまちのいしばし）
文政八年（一八二五）頃に架橋とされる。

南福寺貝塚（なんぷくじかいづか）
縄文前期～後期の貝塚。出土した土器をもとに「南福寺式土器」が設定された。